

## 『今昔物語集』震旦部の方法

—后妃説話をめぐって—

陳 晨\*

### 1. はじめに

『今昔物語集』（以下『今昔』と略称する）は日本古典において、説話文学の最高峰といえる代表的な作品である。平安朝の国風暗黒時代を経て、国風文化重視の気運が高まるなか、隋・唐からの大陸文化の受容と消化によって、日本の文化・文学はどのように変化したのか、特に、手本とし続けてきた大陸文化はどういうふう本土化されたのか、平安末期に成立した『今昔』、殊に震旦部の依拠資料の受容と変容を通してその一端を解明したいと思う。

巻十の5、6、7三話は中国の後妃に関する説話の話群をなしている。巻十の出典資料は『俊頼髓脳』とされ、近年になってから『注好選』も依拠資料に加わったと指摘された<sup>1</sup>。典拠となった『俊頼髓脳』は歌論書として、和歌を解説するため適当に物語を加え、その説話自身はすでに日本化されていたと言えよう。震旦部の物語と言えども、説話中に和臭が溢れていることは一目瞭然である。そこで、本稿では、中国側の依拠資料や故事そのものの伝承の研究を参照しながら、『今昔』震旦部の后妃説話の成立や説話における日本的要素、あるいはその和様化する方法や構想を探り出したい。

### 2. 本論

#### (一)

まず、王昭君像の成立を検討して見よう。

中国において、王昭君に関しては、「单于自言愿婿漢氏以自親。元帝以後宮良家子王墙字昭君賜单于（中略）王昭君号宁胡閼氏、（中略）呼韓邪立二十八年、建始二年死。（中略）復株累单于復妻王昭君、生二女。」<sup>2</sup>と『漢書』には昭君出塞という史実が簡単に記載されている。

『後漢書』となると「（前略）昭君入宮数歳、不得見御、積悲怨、乃請掖庭令求行。呼韩邪臨辞大会、帝召五女以示之。昭君丰容靚飾、光明漢宮、顧景裴回、竦動左右。（後略）」<sup>3</sup>となっている。（下線は筆者、以下同）

殊に、下線部の「入宮数歳、不得見御、積悲怨」と「丰容靚飾、光明漢宮」と言う描写は王昭君の美貌と漢の後宮での悲劇的境遇を加筆したものであった。しかし、張文徳は『王昭君故事伝承与嬪嬙』<sup>4</sup>で詳細な論証をあげて、『後漢書』の記載は信用できないと論じている。つまり、『後漢書』はすでに史実から離れて、作者自身の想像や民間伝承を書き込んでいた。

『西京雜記』には、「元帝後宮既多。不得常見。乃使画工図形。案図招幸之。諸宮人皆賂画工多者十万。少者亦不減五万。独王嬙不肯。遂不得見。匈奴入朝求美人為閼氏。于是上案図以昭君行。及去召見。貌為後宮第一。（中略）帝悔之。」<sup>5</sup>とある。

現存史料によると、画工の話が出てくるのは『西京雜記』が始めとされ、更に、王昭君の容貌

\*北京外国語大学大学院院生

が「後宮第一」とされた。石崇『王明君辞序』に「昔公主嫁烏孫、命琵琶馬上作樂、以慰其道路之思。其送明君、亦必而也」。これで、絶世の美女王昭君が悲劇的に胡国へ嫁ぐ物語が完成したのである。

『今昔』の王昭君説話はほぼ以上の要素を受け継がれたのであるが、中国から受容した故事と次ぎの二点に大きな違いが窺われる。第一、胡国の者の入朝は非常にまずいこと。第二、王昭君の胡国へ去った後、天皇の悲しい姿の描写である。

呼韓邪単于の入朝は朝貢と漢に臣服するため、決して「国ノ為ニ極テ不宣ヌ事也」ではない。それに、王昭君が漢と匈奴の和親によりもたらした平和も否定できない史実であった。中国では、王昭君を詠じた作品は時代に渡って様々なジャンルで作られたが、その時代的な特徴がそれぞれの作品に反映され、一概に言えないが、王昭君の故郷から離れ胡国へ嫁いだ事情に対する同情や、昭君の悲劇的運命に対する感嘆が共通している。

『今昔』の昭君説話に特徴的な描写は王昭君が去った後、天皇が王昭君を恋悲しんでいる場面である。

天皇モ王昭君ヲ恋ヒ悲ビ給テ、思ヒノ余リニ、彼王昭君ガ居タリケル所ニ行テ見給ケレバ、春ハ柳、風ニ靡キ、鶯徒然ニ鳴キ、秋ハ木ノ葉、庭ニ積リテ、軒ノ口（しのぶ）隙無クテ物哀ナル事、云ハム方無カリケレバ、弥ヨ悲ビ給ケリ。<sup>6</sup>

春や秋の風物に関する描写はいかにも日本の色彩の濃い表現だと見なされている。風物の描写は人の「物哀ナル」心境を表している。

だが、これは『今昔』の独特とはいえない。出典とされる『俊頼髓脳』<sup>7</sup>には、ほぼ同じように描かれている。すなわち、日本は中国故事を受容する時、ごく自然に和歌の境地を物語に混じりこみ、日本の情緒を取り込んで日本らしい物語へ変容したのである。

上陽人に関する「春ノ日遅シテ不暮ズ、秋ノ夜長クシテ難晩シ。而ル間、紅ノ顔有シ匂ニ非ズ。

柳ノ髪ハ黒キ筋モ無シ」という描写と楊貴妃が死んだ後天皇の心境に関する「此ノ事ヲ思ヒ不忘ズ歎キ悲ビ給テ、春ハ花ノ散ヲ不知ラズ、秋ハ木ノ葉ノ落ヲモ不見ズ」という描写も王昭君の場合と一致していると見なしてよからう。

## (二)

続いて、上陽人説話に入る。白居易の新樂府詩『上陽白髮人』の日本における受容は『千載佳句』「雨夜」や『和漢朗詠集』「秋夜」などの漢詩文に見られ、『源氏物語』「幻」巻にも採られ、また、『和泉式部集』などの和歌にも詠まれた。『夫に捨てられた悲しみの物語』と『妬みの恐ろしさに気をつけよ』という、原典の意図しない『叙情的理解』や『教訓』として日本に到着した<sup>8</sup>と岡部明日香氏が指摘している。

だが、白詩は叙情的な理解が可能かどうか疑問である。

唐の高宗が洛陽を東都と名を改め、上陽宮は高宗によって洛陽で建立し始め、それ以後、唐の皇帝が洛陽を御幸際の行宮として繁栄したのである。高宗は七回に渡って洛陽を巡行し、洛陽で十一年間を過ごした。<sup>9</sup> 則天皇后が皇帝になった後、洛陽を東都から神都と名を改め、上陽宮で最期を迎えたと言う。<sup>10</sup> 玄宗も前後五回に渡って洛陽を巡幸したのである。そして、代宗は東都上陽宮の生まれであったという。<sup>11</sup>

だが、玄宗の東都巡幸の五回はすべて開元年間のことで、天宝年間になってから、洛陽に御幸なさらなくなったのである。

安史の乱で反乱軍に占領された洛陽は乱の後再び唐軍の支配下に置かれたが、洛陽は今までの重要な副都としての地位を失い、玄宗最後の東都巡幸（736年）から唐王朝滅亡まで、唐の後の皇帝は洛陽を巡幸することは一度もなかったのである。安史の乱を境目として、唐の国力はだんだん衰え、東巡の経済基盤を失われたと言える。当然洛陽における宮殿はただ簡単に夫役に修理を加えさせ、

兵隊が儀式的に見張らせるだけで、門をしっかりと閉ざされ、空っぽのままになっていた。<sup>12</sup>つまり、白居易の『上陽白髮人』における年取った老宮女の話は単なる彼の想像に過ぎないと窺える。

洛陽あるいは上陽宮の繁盛と没落は唐王朝の縮図であるように思われる。白居易の同時代の元稹や王建らが上陽宮に関する詩歌を見れば充分理解できる。

元稹の行宮詩における白髮の宮女は寂しい宮殿のなかで、「閑坐」<sup>13</sup>する時、玄宗の昔話を持ち出しているという描きは中晩唐の士大夫たちの、玄宗の「開元の治」と称される全盛時代を偲んでいることを表明している。

また王建は上陽宮の繁盛と衰弱の両方を描いて、鮮明な相違が読み取れている。

『上陽宮』では、「上陽花木不曾秋、洛水穿宮処処流。画閣红楼宮女笑、玉簫金管路人愁。漫城入澗澄花髮、玉輦登山桂葉稠。曾讀列仙王母伝、九天未勝此中遊。」と昔の上陽宮の繁榮と賑やかさは仙境より勝ると描いているが、『行宮詞』では「上陽宮到蓬萊殿、行宮岩岩遙相見。向前天子行幸多、馬蹄車轍山川遍。當時州県毎年修、皆留内人看玉案。禁軍奪得明堂后、長閉桃源与綺綉。開元歌舞百草頭、梁州樂人世嫌旧。官家乏人作宮戸、不泥宮牆斫宮樹。兩边仗屋半崩摧、野火入林燒殿柱。休封中岳六十年、行宮不見人眼穿。」と「天子行幸」や「開元歌舞」もなくなり、「仗屋半崩」「野火燒殿柱」の零落した空っぽの宮殿になった古行宮を描いた。この強くて鮮明な対比は詩人が衰えつつある国の現状への感慨だと言えよう。

白居易の『新樂府五十首』は「諷諭詩」の範に属していると見なしてまず間違いがないであろう。そのなかの一首である『上陽白髮人』では、上陽宮にいる孤独な女性の一生の描写を通して、唐の後宮制度への批判が窺われる。だが、日本の場合、『上陽白髮人』の受容は美人の容貌に関する「臉似芙蓉胸似玉」の描写、「耿耿残灯背壁影、蕭蕭暗雨打窓声」という情趣のある風物描写に止まっ

ている。『今昔』の上陽人説話も岡部が指摘しているように、天皇に会えず、寂しい宮殿で空しく一生を過ごした美女の悲しみの物語である。身分で後宮の序列が決められている日本の後宮制度下では、公卿の「美麗並比無キ」娘が入内なさって天皇と対面できず、老いていくことは考えられないであろう。だから、『今昔』の撰者は天皇の「悔ヒ給フ事無限カリケリ」まで想像したのである。これは、いわゆる日本的な誤解といえよう。

### (三)

最後に、玄宗と楊貴妃の物語について検討する。その物語を歌われた作品の中で最も有名なのは『長恨歌』である。『長恨歌』の主題については、二つに大分される。一つは女色に溺れ、政治を治めない、国まで滅ぼした玄宗に対する不満であり、もう一つは二人の愛情や楊貴妃の悲劇的運命に対する同情である。

『今昔』の楊貴妃説話の内容は基本的に『長恨歌』に忠実で、玄宗と楊貴妃の愛情や悲劇的運命への同情が主旨と見てもよいであろう。だが、その中で、疑問を抱いているのは以下の引用に見える下線部の三箇所である。

天皇自ラ宮ヲ出テ遊ビ行テ、所々ヲ見給ケルニ、弘農ト云フ所ニ一ノ楊ノ庵有リ。其ノ庵ニ一人ノ翁居タリ、楊玄琰ト云フ。人ヲ以テ其ノ庵ニ入レテ令見給フニ、楊玄琰ガ一人ノ娘有リ。形チ端正ニシテ有様ノ微妙キ事、世ニ並ビ無シ。光ヲ放ツガ如キ也。<sup>14</sup>

このあたりは、『今昔』の独特で、出典である『俊頼髓脳』にもないし、類話とされる『唐物語』(24)、『注好選』(上101)にも似たような表現は見当たらないのである。下線部の「天皇自ラ宮ヲ出テ遊ビ行テ」というところに注目してほしい。

古代中国では、後宮女子の選抜は各地が下から上へ、という方法を多用しているようである。

「詔高力士潜搜外宮、得弘農楊玄琰女于寿邸。」<sup>15</sup>と『長恨歌伝』には書いてある。皇帝は「高

力士をおほせられて」宮の外をあちこち探しまわさせたのである。

日本の古典作品を開いてみると、日本の帝は御幸なさる際や、貴公子が狩りなどをする際には、自ら美女を見つける先例は少なくはない。

『古事記』中巻「神武天皇〔七〕皇后の選定」には神武天皇は大久米命を連れて、高佐土野に行き、そこで遊んでいる七人の乙女の中で、伊須気余理比売を発見し、大久米命が彼女に求婚したという話がある。

同じ『古事記』中巻「応神天皇〔三〕矢河枝比売」には、天皇が近淡海国を巡幸なさるとき、乙女と遭遇して、結婚した話もある。

また、『源氏物語』における光源氏と紫の上との出会いも似たような状況であろう。

それに、美女のことを光輝くような娘として描くことも日本古典には原型があるようである。

『古事記』下巻「允恭天皇〔一〕后妃と御子」には「次に軽太郎女、亦の名は、衣通郎女く御名に衣通王と負ふ所以は、其の身の光の衣より通り出づればぞ。」<sup>16</sup>と記述している。

『日本書紀』の記載は、『古事記』と違って、衣通郎女とされる女子は允恭天皇の娘ではなく、皇后忍坂之大中津比売命の妹となり、允恭天皇の妃にもなっている。だが、光輝くような容貌を持つ美しい女性が、悲劇的な恋愛物語の主人公となっていることが『今昔』と一致している。

また、庵の中に住む翁と光輝くような娘というと、すぐに『竹取物語』の翁とかぐや姫のことが連想されよう。説話とは言え、ここでは、撰者は意識的に物語の伝奇性やロマン性を楊貴妃説話に導入したように思われる。

### 3. まとめ

『今昔』震旦部における三話の後妃説話は、確かに内容は基本的に中国従来への伝承、所謂史実に忠実である。だが、異文化の受容には、曲解や誤

読が避けられないことであり、日本的な抒情的理解が当然作品の中に書き込まれている。

撰者が依拠資料を基に再創作しようとする時、その知識・身分・理解能力・価値観などに大きく左右されていることも充分窺われる。撰者が外国から伝わった資料や原典を採用する過程で、その原典から逸脱した誤読したりすることこそが、特に風物の描写や「物哀ナル」情趣を重視する傾向が、日本人や日本文化の深層的な側面を表しているのではないか。震旦の物語でありながら、誤読そのものが文学交流において意外なおもしろさを与えているのである。

### 注

- 1 宮田尚『今昔物語集震旦部考』五章で、『注好選』の資料性を検討。勉誠社 一九九三年六月
- 2 班固『漢書』卷九十四下・匈奴伝第六十四下 本文は『二十五史1』より上海古籍出版社1986年12月
- 3 範曄『後漢書』卷八十九・南匈奴列伝第七十九 本文は『二十五史2』より 上海古籍出版社1986年12月
- 4 張文徳『王昭君故事伝承与嬪變』第二章、第三節「『後漢書』史実考弁」博士論文 南京師範大学 2004年度
- 5 (晉)葛洪『西京雜記』卷二 上海書店 1989年3月
- 6 卷十付国史「漢前帝后王照君、行胡国語第五」 本文は新日本古典文学大系34『今昔物語集二』(小峯和明校注 岩波書店 1999年3月)より
- 7 『歌論集』橋本不美男・有吉保・藤平春男校注・訳『俊頼髓脳』に参考 小学館 1975年4月
- 8 岡部明日香『楊貴妃と上陽白髮人——白居易新楽府の日本での解釈と受容について』では白居易の新楽府詩『上陽白髮人』と日本の漢詩、和歌、物語などとの受容関係を詳細に論証されている。アジア遊学 勉誠出版 (27) 2001-05
- 9 『新唐書』卷三 本記第三と唐・徐堅『初学記』四庫全書本 卷二十四 居処部に参考
- 10 『新唐書』卷七十六・列伝第一后妃上 本文は『二十五史6』より上海古籍出版社1986年12月 「中宗於是復即位。徙太后上陽宮、(中略)是歲、后崩、年八十一。遺制称則天大聖皇太后、去帝号。諡曰則天大聖后、祔乾陵。」
- 11 『旧唐書』卷十一 本紀第十一 代宗のことを参

- 考 本文は『二十五史5』上海古籍出版社1986年12月
- 12 『隋唐洛陽』郭紹林 三秦出版 2006年
- 13 元稹『行宮』寥落古行宮，宮花寂寞紅。白髮宮女在，閑坐說玄宗。『元稹集』孫安邦・蓓蕾解評、山西古籍出版社 2005年01月
- 14 卷十付国史「唐玄宗后楊貴妃、依皇寵被殺語第七」本文は新日本古典文学大系34『今昔物語集二』（小峯和明 校注 岩波書店 1999年3月）より
- 15 陳鴻『長恨歌伝』原文は国学宝典より『文苑英華』本
- 16 原文は『古事記』より 新編日本古典文学全集 小学館 1997年6月